

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：84604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24560797

研究課題名(和文) 中世日本と東アジアの木造建築における架構システムに関する比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study on the Structural Systems of Wooden Architecture in Medieval Japan and East Asia

研究代表者

鈴木 智大 (SUZUKI, Tomohiro)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

研究者番号：60534691

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は東アジアの歴史的木造建築の構造システム論の創生に向け、技術的・空間的側面から各国の歴史的木造建築を総合的に分析、比較する研究構想の一部として実施した。具体的には中世日本と中国と韓国における木造建築について、その基礎的な情報および論考を集積・把握し、適宜現地調査をおこなった。そして、上記の基礎的な情報を踏まえ、中国の各時代・各地域の建築について網羅的な検討をおこなった。また中国建築における穿挿枋に着目し、日本建築との関連性を考察した。東アジア建築史著述の端緒となるだろう。

研究成果の概要(英文)：This research aims to build up a theory on the structural systems of historic wooden architecture in East Asia. Comparative analyses are made comprehensively upon the views of technology and space performance. In particular, fundamental research materials and theses concerned with the wooden buildings in Medieval Japan, China and Korea, have been compiled and clarified. And Chinese architecture of some eras and areas was considered comprehensively by basic information above-mentioned. It would be a beginning of East Asia architectural history writing.

研究分野：建築史学

キーワード：東アジア建築史 穿挿枋 大仏様 禅宗様 黄檗様 禅宗寺院 法隆寺 木造建築史

1. 研究開始当初の背景

近年、東アジア比較建築史の構築について、その必要性が論じられている。都市的スケールでの研究や、近代建築に関する研究は、徐々に蓄積されつつある。しかし、その一方で、これまで各国で研究が蓄積されてきたはずの古代から近世の木造建築に関しては、個別事例研究の域を脱していない。特に日本においては、研究蓄積が多い分、既往研究における様式概念の縛りが強く、一国建築史として完結してしまっている感がある。その点韓国では、国家的研究機関が中国の古代建築の実測図面・写真集を刊行するなど、リードしつつある。日本はすでに遅れをとりかけている状況にあり、本研究課題を設定した。

2. 研究の目的

本研究は、東アジアの視点に立ち、歴史的木造建築の構造システム論の創成へ向け、東アジア各国・各地域における木造建築について、技術的・空間的側面から総合的に比較する研究構想の一環として実施した。

本課題では、中世日本と同時代の中国・韓国における木造建築について、その基礎的な情報および論考を集積・把握し、その架構システムについて比較検討をおこなうことで、研究の全体構想の根幹を構築することを目的とする。(なお、時代区分については、各国・各地域で異なるため、本申請書類においては、便宜的に日本の時代区分を用いる)。

3. 研究の方法

上述の問題意識のもと、本課題では、そのたいそうを日本・中国・韓国の3カ国の木造建築の架構システムとした。具体的には、建築の軸部を中心に類型化を目指した。一国建築史のうちでは、建築ごとの差異を読み取る場合、共通する点が多い軸部の構成よりも、絵様線形など細部に差異を読み取る作業が中心になってきたが、より広い視野でみると、より大きな相違点や共通点の抽出が可能であろうと推測した。

具体的には、研究対象となる木造建築の平面図および断面の文献資料からの収集をおこない、整理した上で、不足した情報を明らかにした。そして現地調査を実施することで、不足した情報を補充した。

これらの作業で得られた情報を分析することで、後述の成果を得ることができた。

なお、中国・韓国で実施した調査は、以下の通りである。

(1) 2012年11月中国遼寧省

遼寧省瀋陽市：瀋陽故宮

遼寧省義興県：奉国寺・万仏堂石窟・広勝寺塔

(2) 2014年5月中国天津市・河北省・山西省・北京市

天津市薊県：独楽寺

河北省新城市：開善寺

河北省涿州市：閣院寺

河北省正定市：隆興寺・開元寺

山西省長子県：碧雲寺・成湯王廟・天王寺

山西省陵川県：南吉祥寺・崔府君廟

北京市：北京故宮

(3) 2015年3月韓国慶州市

慶州市：月城・月池・仏国寺・石窟庵・感恩寺・四天王寺・慶州国立博物館

4. 研究成果

上述の資料収集、現地調査、資料整理に基づいた考察により得られた成果は、大きく3点にわけられる。以下、個別にまとめる。

(1) 中国建築研究

中国建築については、近年、中国国内において、各建築の調査研究の蓄積・公表が著しい。本研究課題では、最新の研究成果の収集・整理に努めた。そして、中国国内では、研究の途上にある網羅的な分析手法を用いて、2本の論考をまとめた。主に日本の古代・中世移行期に該当する中国建築の分析である。

1つ目は、中国唐・五代十国の現存遺構の平面計画について分析を加えたものである(雑誌論文⑥)。古代の日本では、完数尺を用いた設計が多いが、中国では少数に限られることを明らかにした。中国建築の寸法計画の課題を見出すとともに、日本建築の計画の在り方の特徴をあぶりだすこととなった。

2つ目は、中国福建省の元代以前の建築遺構に関する網羅的な研究である(雑誌論文⑤)。中世日本の建築様式である「大仏様」の源流と指摘される福建省の建築であるが、これまでは個別の建築を取り上げた研究にとどまっていた。本研究により、当時の福建省における建築様式の変遷を明らかにすることができた。また日本の「大仏様」が、福建省の建築の直輸入ではなく、異なる要素が含まれていることを示すことができた。さらに福建省の建築には、同時代の他の地域に比較して、日本の古代建築に共通する要素が多いことも見出すことができた。

以上のように、中国建築の分析は、中国国内の問題にとどまらず、日本建築の在り方を相対化して考えるために、非常に重要なことを見出すことができた。

(2) 中近世移行期の東アジアにおける同時期的変化の解明

つづいて、着手したのが、日本の中近世移行期に該当する東アジア建築の比較研究である。中国建築において明代以降に多用されることが指摘されている「穿插枋」が、日本建築に見出すことができることを明らかにした(図1)。

まず従来、「黄檗様」として、特に意匠的な特徴に重点を置いて理解されてきた建築様式の構造に、「穿插枋」に該当する梁行方

向の繋貫が存在することを見出した(③)。同様の建築部材は、やはり中国出身者が多く携わった長崎の唐寺の建築にも、見出すことができる(雑誌論文①)。

さらに興味深いことに、法隆寺の金堂をはじめとする古代の建築にも、梁行方向の繋貫が用いられていたことを明らかにした(雑誌論文②)。これは、慶長年間における修理に際して、追加された部材と考えられており、昭和の大修理において、当初復元により取り外された(図2)。同様の部材は、他の建築においても文化財保存修理工事において外されたものの、維持されたもの両者ともに、見出すことができた。例えば、奈良時代建立の榮山寺八角堂(奈良)、室町時代建立の東福寺東司(京都)などである。

中国と日本の比較研究の視点とともに、文化財の修理を対象とする点においても、大きな意義をもつ成果と考えている。

(3) 建築様式の再検討

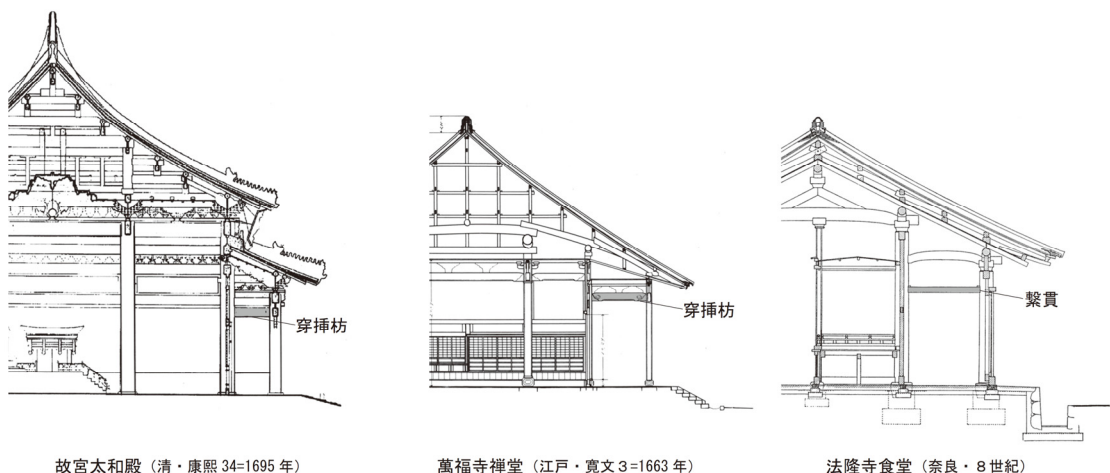
上記の個別研究・比較研究とともに、既往の建築史研究において設定された「建築様

式」の大枠について、再検討も同時並行ですすめた。

まず、この分野で最も重要な先行研究の1つとして挙げることができる関口欣也の業績について、論考発表時の研究状況とともに整理し、その意義と課題を提示した(雑誌論文④)。特に、関口の用いた網羅的な研究方法の重要性を評価し、今日的な研究状況での更新の必要性を訴えた。

さらに、中世日本の「大仏様」「禅宗様」「和様」について、東アジアの視点から国際学会において発表した(学会発表①・②)。これまで日本建築史の著述で設定された建築様式は、日本建築のみを語るために、非常に有効に機能してきた。しかしその反面で、東アジアの視点で捉えると、中国建築史・韓国建築史研究者に誤解を与える恐れがあることを指摘し、各様式の意義について実態に即した丁寧な解説を試みた。

東アジア建築史構築を視野にいれた日本建築史の再構築の試みとも位置付けられる。日本のみならず、中国・韓国・西欧の研究者と議論できたことも大きな収穫であった。



故宮太和殿(清・康熙34=1695年)

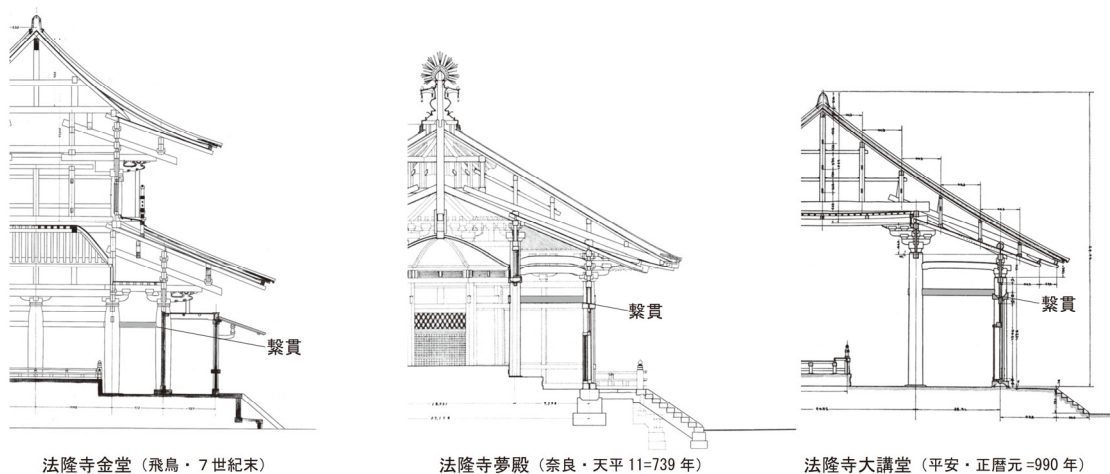
萬福寺禪堂(江戸・寛文3=1663年)

法隆寺食堂(奈良・8世紀)

図1 中国清代の建築と日本の黄檗様建築における穿插枋と法隆寺食堂の繋貫

(『中国古代建築史第5巻』・『重要文化財萬福寺大雄宝殿・禪堂修理工事報告書』・

『国宝建造物法隆寺食堂及細殿修理工事報告』所収の図に筆者が加筆した。縮尺不同。)



法隆寺金堂(飛鳥・7世紀末)

法隆寺夢殿(奈良・天平11=739年)

法隆寺大講堂(平安・正暦元=990年)

図2 法隆寺昭和修理以前の繋貫

(『国宝法隆寺金堂修理工事報告』・『国宝建造物法隆寺夢殿及東院廻廊修理工事報告』・

『国宝建造物法隆寺大講堂修理工事報告』所収の図に筆者が加筆した。縮尺不同。)

(4) 研究の展開

本研究の成果を受け、平成 28 年度より、2つの研究を推進する。

1つは、本研究により得られた、中近世移行期の日本における構造の変革について、さらに多角的な視野から捉える若手研究 (A) (H28-31) 16H06113 「中近世日本と東アジアにおける木造建築の変革に関する比較研究」(研究代表者：鈴木智大) である。

2つ目は、中国建築の「穿插枋」という貫材を日本建築に見出した建築用語比較の方法論を展開させる挑戦的萌芽研究 (H28-30) 16K14369 「日本と中国における古建築用語の相互訳および英訳を通じた比較研究手法の創生」(研究代表者：鈴木智大) である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ①鈴木智大「長崎唐寺における中国建築の穿插枋」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』2016年予定、査読なし)。
- ②鈴木智大「法隆寺慶長修理の繋貫と中国建築の穿插枋」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』2015年、pp.289-290、査読なし)。
- ③鈴木智大「黄檗様建築における中国建築の穿插枋」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』2014年、pp.5-6、査読なし)。
- ④鈴木智大「書評 関口欣也『禅宗様建築の研究』、『江南禅院の源流、高麗の発展』(『建築史学』62、2014年、pp.122-133、査読なし、依頼あり)。
- ⑤鈴木智大・中島俊博・浅川滋男「甘露寺と福建省の古刹」(『鳥取環境大学紀要』第12号、2014年、pp.137-156、査読あり)。
- ⑥鈴木智大「中国唐・五代十国の現存遺構における平面計画」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』pp.607-608、2013年、査読無し)。

[学会発表] (計2件)

- ①鈴木智大「日本の仏教寺院建築における類型と様式」(『建築の分類体系の意味とその比較 東アジア前近代建築史・都市

史円卓会議』清華大学建築学院、北京市(中国)、2015年11月、国際学会、招待あり)。

- ②鈴木智大「禅宗建築の形式と意味」(中世における〈建築〉ヨーロッパと日本、アンスティチュ・フランセ(京都府京都市)、2014年11月、国際学会、招待あり)。

[図書] (計1件)

- ①韓志晩・鈴木智大「清規から見る禅宗の儀礼・生活・建築」(島尾新 編、小島毅 監修『東アジアのなかの五山文化』東京大学出版会、2014年1月、pp.213-220、依頼あり)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 智大 (SUZUKI, Tomohiro)
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員
研究者番号：60534691

(2) 研究協力者

李 暉 (LI, Hui)
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・文化遺産部・客員研究員
研究者番号：30772751

丁 焄 (DING, Yao)
中国天津大学・建築学院・副教授

韓 志晩 (HAN, Jiman)
韓国明知大学校・建築学部・助教授